

・
最初に描いたのは
骸骨の絵

レイ・ブラッドベリ

一九七〇年、二月六日、午前九時。

麻暮正作は、江ノ電に乗っている。

長谷駅から藤沢行きに乗った。

昨夜は、長谷在住の流行作家、東剣市の邸宅に泊まった。

東には貸しがあった。

十年前まで何度も、推理小説のネタを提供したことがあったのだ。

麻暮は東から、（藤沢市の外れに棲む郷土史家の）内田晴彦を紹介してもらったのだ。

江ノ電の乗客は少なくはなかった。

シートは満席で、麻暮も吊革につかまっていた。

まわりの乗客はとうぜんながら、麻暮の風体を奇異で滑稽なものにかんじていた。

だが笑うどころか、口をとざし、硬い表情をつくっていた。

なぜなら、麻暮の鋭い眼光と黒ずくめの五体から、まわりを威圧するつよい光線がはなたれていたからだ。

腰越駅で、また多数の乗客が乗りこんできた。

狭い車内は、厚着の乗客でおしあいへしあいの状態となった。

それでも江ノ電は、呑気にゆったりとはしっていた。

踏切では、ちんちんとのどかな鐘をならした。

海が見え、青空がひろがり、緑の江ノ島が見えた。

麻暮はちいさな体で、他の乗客を押しよけ、車窓から江ノ島を眺めた。

眼光がさらに鋭くなり、五体が武者震いした。

麻暮に接していた乗客らが、おもわず身を退いた。

麻暮はふところから、ふたつに折った薄い一冊の大学ノートを取りだした。

それは、朝山善吉の日記だった。

手下としてつかっている小林金助に、京都の朝山邸に忍びこませ、メモで指定したものを盗ませた。

金助は、指定されたものを総て盗んで、ハーレーダビッドソンで東京にもどった。

そのなかで麻暮が目につけたのが、善吉の日記だった。

○十二月一日、快晴。

江ノ島へ、二泊三日の予定で行く。

松本大海におしえてもらった【D】に、初めて顔をだす。

死を覚悟しているくせに、ショック状態がつづき、この夜は一睡もできず。

○二日、きのうよりも快晴。

【D】の所長、川上宙衛門氏と面談。

かたく口どめされた後、【自殺請負所】の話と【死んだる団】の話をきく。

再びショック状態で、今夜も眠れそうにない。

○三日、風強く、曇。

江ノ島を去る。

選択は三つ。

一、自殺する。

二、殺して、自殺する。

三、殺される。

三十三時間の猶予をもらう。

○四日、曇、のち雨。

父は今日も〈かわらや〉だ。

父の書齋で『暗殺論』再読。

我が父ながら、世紀の大論文だ。

時代を変え人間を変え世界を変えてしまう思想。

松本大海はいった。

「安田砦で東大生はひとりも死ななかつた。

死ななければ勝利のものにはできない」

○五日、曇、ときどき小雪。

死に意味をあたえてはいけない。

死は無であり空であるから。

否、死にこそ意味がある。

生のなかに死があるのではない、死のなかに生がある。

○六日、小雪まじりの雨。

京都の雪は哀しい。

歴史の血の臭いがする。

人命より尊いものがこの世にはある。

父は暗殺されるべきだ。

そのときはじめて『暗殺論』は完璧になる。

○七日、終日、雪。

自殺こそ、人間の持つ唯一の自由。

再び江ノ島へ向かう準備。

【D】がこよなく懐かしいのはなぜだろう。

母が懐かしいのと似ている。

近くの乗客が、首をのばしてノートをのぞいたので、麻暮はすかさずふところにもどした。

江ノ電が藤沢駅に着いた。

麻暮はポケットから一枚の紙切れをだした。

それは、東剣市に書いてもらった、内田家までの詳細な地図だった。

六日、午前十時。

舟木英介は京都駅前にいる。

風は冷たかったが快晴だった。

木下弁太郎との長く綿密な打ち合わせがすむと、木下は舟木を松本玄信のいる壇上裏に連れていった。

「松本先生、舟木です、お久しぶりです」

舟木が丁重に挨拶をすると、松本は微笑んで、

「きのうは失礼しました。

また本日は無理な願いをしてすみません」

と、舟木以上の丁重さで返した。

「きのう、ですか。

やはり、松本先生は北山極齋画伯なのですね」

「探偵さんには変装も通用しませんね。

きのうは極齋、きょうは玄信です。

そして、どうせ隠せないでしょうから白状しますと、あしたは日下典禪なのです。

よろしく願います」

松本玄信は、黒いスーツに赤いネクタイをしていた。

薄い髪をオールバックにして、（風がつよくなったらとんでしまいそうな）八の字の付髭をしていた。

それでも、舟木がかんじたとおりに、物腰も声音も、北山極齋と同一人物だった。

そして、加えて、〈愛信会〉の日下典禪教祖とも同一人物なのだ。

舟木は、この信じられぬはずの現実を、本人を目の前に、素直に信じられた。

天才とは、（大袈裟な物腰、大仰な声音の人間ではなく）こういう静かな物腰、こういう優しい声音をするものかと、舟木にはあらためておもわれた。

（以前は、松本玄信先生ひとりだけを守った。

今回は、松本玄信先生と北山極齋画伯と日下典禪教祖の三人を守るということになるな）

体調がわるく、だるかった体に、なにかが漲る気がした。

松本玄信は壇上にのぼる前に、木下が用意したコップ一杯の水をのんだ。

それから舟木を振りかえり、相変わらず微笑みながら、

「頼りにしています。

舟木さんがいれば安心して演説ができます」

「おまかせください」

舟木は以前から、松本の微笑みが好きだった。

これが〈アルカエック・スマイル〉というものだろうとおもっていた。

そのとき松本が、視界の隅になにかを発見した表情をした。

「なにか怪しげな者がいましたか」

木下が心配そうにそうたずねると、

「なんでしょうね、あの葬列は」

と松本はつぶやいた。

しかし木下にも舟木にも、それらしいものはどこにも見えなかった。

「もしかすると、朝山完吉先生の告別式かもしれません」

哀悼の意をこめて、舟木があえてそういうと、松本はしばし瞑目した。

松本が壇上にのぼりマイクを手にとると、(後の公称) 一万人の聴衆が一斉に拍手をした。

聴衆のもの凄い熱気といささかの殺気をかんじつつ、舟木も壇上にあがって、松本の斜めうしろに立った。

「みなさん、おはようございます、松本玄信でございます。

お寒いなかを、おおぜいお集まりいただき、恐縮しております。

不肖私が、どうして京都までやってきて、どうしてこの場をお借りして、みなさまにお話させていただくのか。

みなさまのなかには、松本が、だいそれた、ぶっそうな、しちめんどうくさい、常軌を逸した、謙譲の美德を欠いた、話をするにちがいないと、お思いのかたもおおかろうと存じます。

すでにテレビ、新聞、週刊誌などで、いろんな情報を目にしている方もおいででしょうし、この私の考え方を好まれぬ方もおいででしょう。

けれども私は、しごく単純でやさしい、当たり前のことながらを云々するにすぎません。

どうかそのところをあらかじめご承知いただいて、お気軽に、また殺意などももたずに、耳をかたむけていただければ幸いです」

ここまで語りかけて、松本玄信は下をむいて咳払いをひとつした。

舟木英介は、松本のやわらかい調子の演説を聴きながら、とても命を狙われる存在とはおもわれなかった。

松本はひと呼吸おいて、再び話しだした。

「ごぞんじのように、日本は文化国家です。

あるいは、真の文化国家にならなければいけない国です。

もちろん文化とは、芸術でも芸者さんでもありません、富士山でも金閣寺でもありません、嵯峨野の四季でもお寿司でもありません。

文化は、精神的なるものです、いわば、魂です。

日本人の、いにしえから脈々とつながる魂こそが、文化なのです。

それでは、その日本人の魂のふるさととは、どこでしょう。

そのとおりです、この地、京都をおいて、他にはありません。

ここまで、ご理解いただいたことにさせていただいて、こんどは、日本人の魂の象徴、ということをかながえてみましょう。

魂は、霊、といってもいいかもしれません。

正確にいうなら、言霊、と書いて、ことだま、です。

幸運にも私たちは、言霊をもっています、というよりも、私たちの心や体のなかに、言霊が存在するといってもいいでしょう。

こうして私が語っているのも、また私たちの日々のいとなみも、すべて言霊のなせるわ

ざと申せましょう。

言霊の導きによって、私たちの日常の生、そして死があるのだとおもわれます。

もうお気づきでしょう、言霊の象徴は、おそれおおくも天皇陛下をおいて、他にはありえません。

そして、天皇陛下がお帰りになるべき、ふるさとは、京都をおいて、他にはありえません」

とつぜん一発の銃声がした。

つづけて二発目の銃声がした。

一発目は、松本玄信のこめかみのそばを通った。

二発目は、すばやく身を挺して松本をかばった、舟木英介のスーツの脇腹あたりを通過した。

体のほうは大丈夫だと踏んだ舟木は、松本の前で両手をひらいた。

聴衆が騒ぎながら、左右に逃げ、散った。

その割れ目に、ひとりの男だけが残った。

男は、目と口だけが見える覆面をしていた。

突きだした両掌に、大型の拳銃が握られていた。

「ピストルを捨てろ」

と舟木は怒鳴った。

三発目が発射され、弾は舟木の頬をかすめた。

おもわず手をやると、血で濡れていた。

それでも舟木はひるまずに、

「覆面をとれ、卑怯者め」

と怒鳴った。

男は応えずに、幼子の泣き声だけが響きわたった。

男は拳銃を構えたまま、一步二歩と近寄ってきた。

舟木はとびかかろうとしたが、まだ男との距離は、七、八メートルはあった。

とっさに舟木は、警官が駆けつけるまでの、時間稼ぎをしようとかんがえた。

だが（舟木はしらなかつたが）駅前の交番の警官たちは、応援を要請したまま、動こうとしていなかった。

「何者なんだ、名をなのれ。

もしいいたいことがあれば、きこうじゃないか。

松本先生に、聞く耳がないわけではない」

「問答無用、そこをどけ」

と男はいつて、にじり寄ってきた。

沈着冷静といってもいい様子と、男の声音に、舟木は覚えがあった。

男は、四発目をなかなか発射しなかった。

四発目で舟木を倒せば、五発目で松本を倒せるのに、そうしなかった。

パトカーが到着し、警官が四人駆けつけたが、手はだせないまま立ち往生した。

舟木は、男に自分を撃たせて、同時に男にとびかかろうと、挑発することにした。

失敗しても、四人の警官がとびかかってくれるだろう。

「そんなへっぴり腰では、松本先生ひとり撃てっこないぞ。

いやひとりじゃない、おまえはへなちょこ弾で、三人の人間を撃つつもりなのか、このおもいあがりめ。

松本玄信先生と、北山極斎画伯と、日下典禪教祖を」舟木の声に、急に男はひるんだ。

いや、舟木にはこの瞬間はわからなかったが、舟木の声ではなく、日下典禪の名前にひるんだのだ。

烈しい動揺が、男の目のなかにあらわれるのを、舟木は見のがさなかった。

男は、構えた拳銃をおろし、一步一步と近寄ってきた。

男から、殺気は消えかかっていた。

それに気づいてか、松本玄信が舟木のうしろから姿を露わした。

男は立ちどまって首をのぼし、松本を凝視した。

男の口から、男自身にしかきこえない嗚咽が漏れる。

「日下典禪尊師ではありませんか。

これは一体なんということでしょう」

いまだ、と舟木がとびかかろうとした寸前、男は銃口を自らの口中に突っこむと、ためらうことなく発射した。

不気味な音があたりを震撼させ、その直後には、男の脳味噌が音もなくふるえていた。

舟木は、四人の警官とともに、倒れた男ににじり寄って、即死を確認した。

手袋をした警官が、血と脳味噌で濡れ雑巾さながらになった覆面をはがした。

崩れた顔はほとんど原型を留めていなかったが、舟木にはよくわかった。

舟木は合掌し、瞑目した。

辻中亀夫の亡骸に。

六日、午前十一時。

麻暮正作は、内田晴彦の家の前にいる。

家というよりも庵という佇まいだった。

門はなく、花壇にはさまれた石畳をあるくと、縁側にでた。

麻暮が名のと、すぐに内田はでてきた。

白髪を肩までのぼし、和服を着ていた。

内田は麻暮の風体にべつだん驚きもせず、親しげな微笑でむかえてくれた。

挨拶をかわした後、座敷にのぼるよう勧められたが、麻暮は縁側に腰をかけた。

ひとり住まいの様子だったので茶も断り、麻暮はさっそく切りだした。

「東剣市さんからお聞きしたのですが、内田さんは〈江ノ島植物園〉をひらいたサムエル・コッキングや、〈海洋実験所〉をひらいたエドワード・モースの研究をしているとのことですが」

「はいはい、それと『怪談』のラフカディオ・ハーンですな。

ハーンには『日本印象記』があり、そのなかに『江ノ島行脚』の項目がありますが、ごぞんじでしょうか」

「ボクは無知が取柄でして、頭の弱いのを、こうして帽子で隠しているのですよ、ケケケ」

「能ある鷹はなんとやら、東氏がいっとりましたぞ。

麻暮さんが作家になったら、自分なんか食いつぱぐれしてしまうとな。

ともかく、ハーンは『江ノ島行脚』のなかで、こんなことを書いておるんですな。

【江ノ島というところは、ちょっと忘れがたいスリルをもった、何ともいえない魅力のあるところである】」

「スリルですか」

「コッキングは【あやしい美しさ】とっておりますな」

「ボクには平凡な島に見えますがね、ケケケ」

麻暮はわざとそういつてみた。

あんのじょう内田は、手をふりつつ身を乗りだした。

「それが、とんでもありませんでな。

正面からみるとのどかな緑の島ですが、裏側には危険な峻しい岩場もありますでな。

その岸壁には、謎を秘めた洞窟がいくつもありますぞ」

「洞窟、洞窟ですか」

麻暮は期待どおりの話に、こちらも身を乗りだした。

「はいはい、知る人ぞ知るといったもんですな。

なんと十二もあるんですぞ」

「なるほど、そのなかでコレというものは」

「まあ、〈秘龍窟〉につきますのう」

「ひりゅうくつ、秘、龍、窟、ですか」

いっしゅん麻暮の眼が光った。

内田は気づかずに、遠くを見ながら語りつづける。

「明治十八年に刊行された、『江の島名勝雑誌』に、この洞窟の記述がありますでな。

【前面の海水蒼蒼として藍の如く故に庶人恐怖し窟中に入り来る者なし】」

「だれも入った者はいないのですか」

「いやいや、こわいもの見たさは、いるもので。

明治三十年に、探検が敢行されておりますな。

探検隊は、江見水蔭、川上眉山などの文士たちですな」

「それで、成果は」

「髑髏一個発見」

「たったそれだけですか」

「なにしろ奥が深い。

内緒の話ですがな、コッキングが密輸をして、ブツの隠し場所として利用していたという説もあるのですぞ」

「〈秘龍窟〉の、位置は」

「灯台の、足下」

「それはわかりやすい」

「ちょいとお待ちを」

内田は席をはずし、すぐにまたもどってくると、手描きの地図をひろげた。

「これはいったい」

「〈秘龍窟〉の窟中の図面ですぞ。

わしがこしらえたもので、まだ未完成ですがな」

「ということは、内田さんも」

「昭和二十七年のことでしたな。

わしの他に四人、総勢五名で決死の探検隊を組織しましてな。
ボートにのって洞窟の奥深くは行っていったんですな」
「それで、成果は」
「弁解ではなく、潮流が激しくてのう。
ボートは洞窟の壁に叩きつけられるし、闇は深い。
探索は難航してのう。
全員濡れ鼠となって、命からがら引きあげたわけだな」
「それで、髑髏一個とか、ケケケ」
「この地図でいくと、ここまで行った、約二十メートル、ボートではここまでが限界でのう。
だが、まだ先がある、横穴もある、ほれ、これが当時の新聞記事ですぞ」
内田がひらいた古ぼけた〈毎日新聞〉の大見出しにはこうあった。

《鬼がでるか蛇がでるか？
謎の「秘龍窟」探検！》

「鬼か蛇がでましたか」
「想いだすのもおそろしく忌まわしい。
〈秘龍窟〉そのものが、鬼であり蛇でありますな。
ハーンではないが、たっぷりスリルを味わいましたぞ」
「それで〈秘龍窟〉は現在どうなっているのですか」
「危険すぎてな、あれ以降だれも立ち寄らんのを。
いまは、立ち入り禁止になっとる」
「そうですか、たいへん参考になりました」
「もうお帰りか、まだ面白い話がやまほどありますでな。
たとえばコッキングの奥方というのが」
「いえ、ボクには時間がありません。
予想以上の収穫でしたので、早速仕事にとりかからねばなりません」
「まさか、麻暮さん、〈秘龍窟〉にいく気ではなからうな。
鬼か蛇に食われてもしりませんぞ」
「ご心配ご無用。
ボクだって、このとおり人を食ったかっこうですから、ケケケ」
ふたり、顔を見あわせて笑った。
麻暮が腰をあげると、
「この地図をもっていきなされ」
と、内田は手描きの地図をくれた。
「貰いついでに、もうひとついただけないでしょうか。
あれを一輪ほしいのですが」
麻暮は、明るい陽射しをあびている寒椿を指さした。
「おやすいごようですな」
内田は奥から小刀をとってくると、ゆくりなく庭におりて、寒椿の枝を一本、切り口鋭く見事に切った。

麻暮はそれを胸に刺し、丁重に礼をいいながら内田家をあとにした。

六日、正午。

舟木英介と松本玄信は、京都から東京へむかう（松本所有の）ベントのなかにいる。
木下弁太郎は、後始末や京都府警の事情聴取等があって、京都に残った。

「舟木君、おかげさまで命拾いしました」

（すでに付け髭もネクタイもはずした）松本が両掌を合わせた。

「とんでもありません、ぼくがいながら、犯人を自殺させて申し訳ないことをしました」

舟木はいいながら、自分は辻中亀夫のことが好きだったのだとおもった。

全共闘の辻中は、政財界のボス松本玄信を暗殺するために、嵯峨野に潜伏していた。

天皇陛下を敬う辻中は、松本が恐れおおくも、京都遷都を画策していることにも我慢が
ならなかった。

だが、〈愛信会〉の日下典禪教祖を神ともおもう辻中は、松本と日下が同一人物である
ことを、自分の眼で確認してしまった。

おそらく辻中は、烈しい困惑のなかで自死したにちがいない。

そうかんがえると、舟木には辻中が哀れでしかたがなかった。

けれども横に坐る松本を憎む気持ちもなかった。

（けっきょく、ぼくは政治とか宗教とか（芸術にも）興味はない。

私立探偵として、死に物狂いで仕事をするだけの、でくのぼうなのだ）

「傷は痛みますか」

舟木の頬のガーゼを見る松本の眼は慈愛にあふれ、その声はかぎりなくやさしかった。

「かすり傷です」

「じつは木下君が、舟木君以外に、三名のボディガードを手配してくれていました。

けれども連中は、犯人発砲の瞬間に逃げ散ってしまいました。

舟木君を信頼していなかったわけではありません」

舟木はそのことをしっていたが、

「だれでも命は惜しいものです」

とittedただけで溜息をついた。

舟木の胸のうちを読んだのか、松本は舟木の肩に手をおいて、こうささやいた。

「あの犯人とは顔見知りだったようですね、すまないことをしました。

できることなら射殺されてあげたかったが、私も命は惜しいのです」

「あの件で一度会ったきりです。

松本先生は、いえ日下教祖は、〈愛信会〉の信者である辻中亀夫という男を、ごぞんじ
なかったのですか」

舟木は詰問調になるのを、抑えきれなかった。

「いまや信者も全国で百万人ですから、恥ずかしながら見覚えはありません。

犯人が本当に信者かどうか、それも警察で調べてくれるでしょう」

「警察を信じているくらいなら、探偵商売はしていません」

皮肉っぽくなったのは、松本がごまかしている気がしたからだ。

総ての信者が、日下典禪が松本玄信に似ているとはかんじても、同一人物だとは信じな

いはずだ。

それなのに、辻中は確信した。

日下典禪と、身近に会っていたから、わかったのではないのか。

そしてもしかすると、辻中亀夫が、松本玄信の暗殺を画策していることすら、日下典禪はしっていたのではないか。

だからこそ、ボディガードを四名も用意した。

しばしの沈黙状態ののち、

「先生、ひとつ質問してもよろしいですか」

と舟木は切りだした。

「探偵さんとしてですか、それとも」

「個人的な質問です」

「なんなりと。」

けれどもうまく答えられるかどうかは、神のみぞしる、ですが」

松本の表情に微妙な翳りがでたことに、舟木は気づいた。

しかしそれが、どこからきているのかはわからなかった。

「松本先生にとっては幼稚な質問かもしれませんが、〈愛信会〉というものは、どういう信仰をかかげて、どんな教えを説いているのですか」

「困りました。

私はまだ松本玄信でして、日下典禪になるにはもうすこし時間が必要です」

「ですから、ぼくは日下教祖ではなく、松本先生にお尋ねしているのです。

先生のごぞんじの範囲内で、〈愛信会〉のことを教えていただきたいのです」

松本は、なんとなく嬉しそうに苦笑し、

「そうきましたか、舟木君も隅にはおけませんね。

それでは私なりにお答えしましょう。

日下典禪が、大仰にかかげるもの、説くものなんてありません。

ただ、祈る、ひたすら、祈るだけです」

「なにを、どう祈るのですか」

舟木は、当然の質問をした。

松本は、次の言葉を選んでい風だった。

「にんげんという、あわれなイキモノを祈るのです。

日下典禪が〈愛信会〉の信者とともにつとめているのは、つまるところそのことのみです」

こんどは、舟木が言葉を選んだ。

祈るだけで、百万人の信者をかかえられるとはおもわれなかった。

舟木のかんがえでは、歴大な数の人間をまとめあげるには、かならず強大な、あるいはしぶとい敵を必要とする。

しかしそのことをいっても、松本は答えないだろう。

舟木は、切り口を変えることにした。

「謙遜ではなく、ぼくは頭がよくありません。

それでも松本玄信先生の志向の一端は、先ほどの演説でわかりました。

北山極斎画伯の芸術観も、京都のPR誌でなんとなく理解したつもりです。

では日下典禪教祖の思想は、ひたすら祈るのみとおっしゃる。

失礼な意見ですが、三賢人共通のポリシーというか、コンセプトというか、三賢人に通じる、マグマというか地下水道というか、そういうものが、鈍いぼくにはピンときません」「そうですか、そうでしょうね」

といったきり、松本はしばし思いに沈んだ。

そして顔をあげたときには、ふたたびやわらかい表情がもどっていた。

「かんがえてみれば、いえ、かんがえてみなくとも、私は役者なのかもしれません。

役者、つまり、自分でない人間を演じる。

演じているうちに、興が乗って、というよりも、使命感なのか、単なる憑依なのか、その人間になりきってしまうのです。

私は、玄信を演じ、極斎を演じ、典禪を演じます。

もしかすると私は、大根役者なのかもしれない、というのは、私は、いわゆる大物しか演じることができないからです。

そうして、いずれ後で告白することになるでしょうが、私の演じる役の個性は、なんと共通する点がとてもおおい。

ポリシーとかコンセプトとかマグマとか地下水道とか、そういうものは、舟木さんにはピンとこなくても、演じている私自身には、ズンとわかるものがあります。大根役者ですから、みんなけっきょく同じパターンだなど、忸怩たるおもいで、よくわかるのです」

「でも、演じられたキャラクターではなく、演じる役者である人は、いったいどういう方なのでしょう」

「それはまだ公にはできません。

こんな説明では不足でしょうか」

「いえいえ、だいぶわかった気がします」

たとえば松本大海のことなど、他にも聞きたいことはすくなくあつたが、舟木はここで口を閉ざした。

後で告白することになるとの、松本の言葉を信じたわけではない。

松本を田園調布の邸宅まで無事帰すことができれば、もう舟木の仕事は終わるのだ。

いまは舟木は探偵ではなく、ボディガードなのだから、これ以上詮索するのはやめたかった。

(それにしても)

と舟木は、こころのなかでつぶやく。

(この人物は、どうしてこうも平然と落ちついて、微笑をたやさずにいられるのだろう、あやうく自分が殺されそうになったというのに。

そして自分の目の前で信者が自殺したというのに)

六日、午後一時。

花井健太は、江ノ島の灯台のうえにいる。

花井刑事は何時間もかけて、地元の宿屋や土産物屋を何軒も取材してまわった。

しかしだれも、荒野大三郎と荒野(松本)大海のことをしらなかった。

山風との約束の正午に橋までもどったが、山風がくる気配がないのでまた捜査を開始した。

不審な建造物がないか、隠れ家らしきものはないか、海岸付近もまわったし、植物園の内外も観察した。

なにも得るものがなかった花井は、係員に頼んでこうして灯台にのぼり、平穏な江ノ島全体と静かな海をながめている。

花井は、係員に借りた望遠鏡をつかって、山風刑事と別れた地点を集中的に観察した。かなり倍率の高いものにおもわれたが、まだ山風順一はもどってくる気配がなかった。花井は望遠鏡をぐるりとまわし、足下にひろがる海面を観察した。

すると、なにか浮かんでいるのに気づいた。

望遠鏡を眼に押しあてると、それは一艘の小舟らしかった。

花井はいそいで灯台をおり、小道をくだり、岩の足場をもくだっていった。

眼下にたしかに小さな舟が見え、黒ずくめの男が二本の櫂でこいでいた。

花井が崖のうえからながめていると、男の胸の赤い花まで見えるところまで、小舟がちかづいてきた。

おもわず花井は手でメガホンをつくり、精一杯の大声をあげた。

「麻暮さーん、麻暮さーん、では、ありませんかあ」

小舟の男がふりあおいだ。

花井は凸凹の岩のあいだを、一步一步足場をたしかめながら、おりていった。

海面がちかづくと、小舟がしだいに自分のほうに寄りそってくるのが、花井にはわかった。

「やっぱり、麻暮正作さんですね」

「どうしてボクのこと知っているのよ」

麻暮は不快そうな声をだした。

「それは有名な探偵だからです。

そう先輩がおしえてくれました」

「有名ならおしえてもらわなくてもわかるでしょうよ」

「すいません、僕は無知な刑事で花井といいます」

「デカか」

「デカはきらいですか」

「好きになりたいけど、デカがいなけりゃ、ボクの商売はもっともうかるのよ」

麻暮はまた不快そうな声をだしたが、小舟はもう岸につくところだった。

「邪魔はしません、同行させてくれませんか」

花井は両掌をあわせた。

「このボロに乗るっていうの、ひとりでも沈みそうなのに」

「だいじょうぶですよ、いざとなったら泳ぎますから」

「ボクはカナヅチなのよ。

ボクがいこうとしてる【秘龍窟】はすぐそこよ。

君なら泳いでいけるよ、ケケケ」

「ご冗談を。

このとおりです」

また花井は両掌をあわせた。

「しつこいね。ボクは仏壇じゃないのよ」

「神様、仏様、麻暮様」

同行させてくれるなら、花井はいくらでも拝むつもりだった。
「ケケケ、そんなに同行したいのね。
ボクはただ江ノ島観光してるだけなのに」
麻暮はわざと漕ぎだすふりをした。
花井は本音をいうしかなかった。
「【死んだる団】の、アジト探しですね。
荒野大三郎を、追っているのですね」
「なんだと」
急に麻暮の表情が変化した。
眼光が鋭くなり、花井は刺されている気がした。
麻暮の両眼は、花井のどんなかすかなところの動きも、どんなささいな言葉も、見のがすまい聞きのがすまいとして、まばたきすらしない。
「僕と先輩は、ここ数日ずっと【死んだる団】を追ってきたのです。
そうして松本大海という青年を尾行して江ノ島まできました。
しかしここから先は、麻暮さんの導きが必要だと気づいたのです。
大海はおそらく荒野大三郎の息子です」
しばしの沈黙ののち、麻暮は重い口をひらいた。
「乗りなさい。
目的はちがっても、目指すところはおなじらしい」
「ありがとうございます」
花井は岸についた小舟にとびのった。
「ただ、条件が三つある。
ひとつは、君の命をボクは保証しない。
ふたつめは、今後はボクの指示にしたがってもらう、というのは、単独の捜査活動は足手まといになるからね。
みつつめは、荒野大三郎はボクにまかせることだよ」
「まかせるとは」
「ことばどおりだよ。
君はいっさい手出し無用、荒野大三郎はボクが始末をつけるのよ、ケケケ」
麻暮の眼光がさらに強く烈しくなった。
その光に、殺意とよぶべきか狂気とよぶべきか、とにかく正常ではないものを花井はか
んじた。
「わかりました、そのようにします」
花井はそういうしかなかった。

六日、午後一時半。

舟木英介と松本玄信は、まだベンツのなかにいる。
松本が運転手になにやら指示を与えた。
舟木はその指示に、だいぶ経ってから気づいた。

「先生、お宅は田園調布ではないのですか」
「そうです」
「でも、この車は、高速をおり、横浜を越えましたから、湘南方面に向かっていますね」
「そうなんです」
「どこにいくのですか」
「ふるさとに帰るのです」
舟木は京都のPR誌を思い出した。
北山極齋のふるさとは、江ノ島だ。
「先生、江ノ島ですね」
「よくわかりましたね」
「江ノ島にもお宅があるのですか」
「隠れ家みたいなものです」
といて、松本は微笑した。
「ぼくも江ノ島へいくのですか」
「はい、なぜって、舟木君は逢いたいひとがいるでしょう」
「いないことはありませんが、江ノ島にも先生にも関係のないひとです」
舟木は、川上真希を思い出していた。
「そうですか、真希さんは、私と無関係ですか」
舟木は耳をうたがった。
松本先生が真希を知っているとは。
舟木は松本をまじまじと見た。
(得体のしれないひとだ。
やはり大海と無関係ではない)
「真希に逢わせてくれるのですか」
「江ノ島に帰るのはそのためです。
命の恩人の舟木君を、恋人に逢わせてあげたい、その一心です」
「それは驚きですね。
真希はいまどこでなにをしているんですか」
「私がね」
といて、松本はくすりと笑ってから、
「あるところに監禁しているのです。
もう何ヶ月になるのでしょうか」
「他人事みたいですね。
いったい真希がなにをしたというのですか。
真希が【死んだる団】だとでもいうのですか」
舟木は声を荒げたが、怒っていたわけではない。
舟木なりの計算があった。
松本は声をおとし、ほとんど囁き声で話しはじめる。
「真希さんは、なにをしたわけでもありません。
ただ、真希さんの存在じたいが困るのです。
私のできそこないの息子が、真希さんに夢中になってしまったのです。
息子はまるで人さらいのように、舟木君から真希さんを取りあげてしまいました。」

もちろん、それは真希さんの本意ではありません。
真希さんは息子にむりやり置き手紙を書かされたのでしょう。
けれども、真希さんはしばらく息子につきあわされて、いわば情にほだされてしまった
のですね。

真希さんの性格は、こどものころからよくしっています。
なにせ、私の門下の川上宙衛門の養女ですから。
私は、息子を邪念から解放させるために、真希さんを密かに監禁したのです。
尤も、息子はあとになって気づいたようで、真希さんを救いだすために、いまごろ江ノ
島へむかっているかもしれません。

いえ、心中するために、真希さんを取りもどしにくるかもしれません。
おっしゃるとおり、息子は、私にとって不本意なことに、【死んだる団】なのですよ」
舟木には、松本の囁きが、悪魔の囁きにきこえた。
舟木の予想を、はるかに超えた展開だった。
なんと応じてよいかわからず、とりあえずひとつだけ確認してみることにした。

「それでは、息子さんは、やはり松本大海」

「おや、息子をごぞんじでしたか。

それはそうでしょうね、舟木君は探偵ですものね。
自分の恋人を拉致した男の正体くらい、とっくに調査済みなのでしょうね」
松本の声音は相変わらず優しくかったが、どこかに皮肉がまじっていた。
舟木は、岩風呂に沈められたくるしさを、あらためて思いおこした。

舟木は、はじめてこみあげてくる憤怒を抑えながら、
「ぼくは、息子さんに、殺されそうになったんですよ」

「いやはや、それはそれは、申しわけありません。

大海が万一殺人に成功していたら、私はどうなっていたのでしょうか、くわばらくわばら」
からだを震わせる松本を見ながら、舟木には演技としかかんじられなかった。
なぜなら、自称役者の松本の表情は、冷ややかとおもわれるほど、おちついていたから
だ。

「先生は【死んだる団】について、なにかごぞんじなのでしょう。

ささいなことでもけっこうですから、教えてくださいませんか」

「ささいなところではありませんが、ノーコメントですね。

いずれ真希さんからきけばよろしいではありませんか」

「ほんとうに逢えるのでしょうか」

(もし運良く逢えたなら)

と舟木は祈る気持ちでかんがえた。

(探偵稼業から足を洗おう。

ボディガードもやめよう。

真希といっしょに生きていきたいから)

「信じていれば、なにごととも叶います。

おっと、いけませんね、私はいまは日下典禪ではありませんでした。

それどころか、松本玄信でも北山極齋でもありません。

私はいま、素のおのれにもどって、舟木君と話しているのです、荒野大三郎にもどって」
「こうや、荒野、大三郎」

「おや、ごぞんじでしたか。

ずいぶんカネとヒトを使ったので、本名は隠し通せるとかかんがえていたのですが」

「いや、残念ながら、失礼ながら、しりませんでした」

舟木はしっていたが、そう答えた。

松本が主役なら、自分は脇役くらいの演技をしなければ、とかかんがえていたのだ。

(十年ほど前になるだろうか、迷宮入りになった事件があった。

【ABC殺人事件】だったか、なんだったか。

その容疑者として浮かびあがっていたのが、たしか荒野大三郎。

麻暮正作が追いつめたという噂があった。

想えば、ぼくはあのときの麻暮正作探偵の活躍をきいて、探偵になったのだ)

松本に見透かされている気がしたが、舟木は、事件のことも麻暮の名も、当然ださなかつた。

舟木は、話の方向をもどそうとおもった。

「そういうことでしたか。

すると、先ほどの話にもどすと、荒野大三郎さんが役者ということになりますね。

荒野さんが、松本先生、北山画伯、日下教祖の役を演じきる。

どうなのでしょう、三者三様の偉人を演じるコツというか、方法論をおきかせ願えますか」

荒野大三郎はめずらしく、峻しく厳しい顔つきになった。

だがそれもいっしゅんで、また微笑をたたえると、答える準備のために坐りなおした。

荒野の微笑は、朝山完吉のフィロソフィカル・スマイルを、舟木に想いおこさせた。

「玄信、極斎、典禪。

政治、芸術、宗教と、ジャンルはわかれていても、この三人には、おおきな共通点がいくつかあります。

まずは謙遜ぬきで、三人ともに、俗人だということです。

お国のため、文化のため、人類のためと、口ではいっているけれども、いえそれは、まったくの口八丁でもないのですけれども、それよりも権力と金と名誉と賞賛がほしい。

またこの三人は、それぞれに生まれも育ちも住まいも異なっている、ということになっていますが、それはそれぞれに女がいたからです、北は札幌から南は沖縄まで。

ところが、一緒に暮らす女は、みんな大女でしてね、コンプレックスですよ、小男の。

ごぞんじのように、元が平凡な顔ですから、いくらでもへんそうできますが、背丈ばかりは、竹馬にでも乗らないと変えられません。

それからまだあります、これが重要なのでして、三人とも死にたいする恐怖が、ハンパではありません。

極斎は、死にたいする恐怖から、絵を描いている。

肉体は滅んでも、絵に託された精神は生き残るわけですから。

花を死にむすびつけようとする、こじつけの思想は、あきらかに死への恐怖であって、親近感ではありません。

また典禪が、愛と信仰は死よりも強し、なんてくりかえし唱えているのは、いわば死からの逃避でしょう。

玄信は、さらに死を恐れる、それで、失礼ながら舟木君のような、命しらずの有能なボディガードを雇うのです。

さっきの玄信のうろたえぶりをご覧になったでしょう、暗殺者から逃れるために、恥ずかしながら舟木君を楯にしました。

そうしていま、防弾ガラスのベンツに乗っていても、舟木君と一緒になければ、恐ろしくてふるさとに帰れないのです」

「それはご謙遜でしょう、ぼくにはそうは見えませんでした。

ぼくが先生の前に立ちふさがらなければ、先生は逃げも隠れもしないで、辻中亀夫に殺されるつもりだったのではありませんか」

舟木はおもったまを口にした。

荒野は微苦笑をもらし、

「いかばかりですね。

恐怖のために立ち往生していたのです」

「そうは見えませんでした」

舟木がくりかえすと、荒野はまた坐りなおし姿勢をただした。

「それでは舟木君が誤解なさらぬよう、荒野大三郎の本性をおきかせしましょう。

荒野は死の恐怖から逃れるためでしたら、それこそなんでもするのです。

たくさんの芸術作品をつくり、たくさんの信者をつくり、たくさんの敵をつくる。

死の恐怖をたちきるためには、暗殺の危険に身をさらすことが重要ですから。

信じられませんか、虎穴にいらずば虎児をえず、のたとえですよ」

「もしそれがほんとうだとしたなら、荒野大三郎という稀有な個性が、日本の政治と芸術と宗教を、左右しているということになりますね。

まるで日本そのものが、死の影におおわれている、そんな気もしてしまいます」

「それもいかばかりです。

それは表の顔にすぎません」

「では裏の顔とは」

「こっそりお教えしましょう。

依頼人の秘密を守るのが探偵ですから、舟木君に白状しても、私はちっとも困らないでしょう」

「もちろんです」

「荒野大三郎の、死にたいする恐怖が、尋常でない証拠をおきかせしましょう。

荒野は、自分の女を、自分を信じてついてきてくれた女を、みんなこの世から消したのです」

「殺した、というのですか」

「正確には偽装心中です。

殺しただけでなく、騙しもしたわけです」

「女のひとも、それを望んだのですね」

「望んだ、というよりも、望ませた、といったほうが当たっているでしょう。

とにかくみんな、すごい大女ですから、毒薬も効かないし、首を吊っても縄が切れる、ですから」

「ですから」

「消したのですよ、爆弾で」

「それはひどい、どうしてそんなことを」

「おわかりになりませんか。

大切な女が、みんなあの世にいる、この世への未練がうすれる。

つまり死の恐怖がなくなります」

「そうになりましたか」

「それが、残念ながら。

世界中の人間をすべて殺さなければ駄目かもしれません」

「そうですか」

と応じながら舟木は、【死んだる団】の黒幕は先生ではありませんか、というかどうかどうしようか迷った。

迷っているあいだに、荒野はまた喋りだす。

「もうひとつ、おまけにお話しましょう。

同じ商売ですからごぞんじでしょう、麻暮正作探偵のことです」

あやうく舟木は声を発するところだったが、なんとかのみこむことができた。

「麻暮さんも私にまけずおとらず、小男です。

しかしながら麻暮さんには コンプレックスが皆無です。

それはそうでしょう、麻暮の才能ときたら、玄信、極齋、典禪の三人、東になってもかなわない」

「それほどの才能があつたら、探偵なんかやっているのでしょうか」

「能ある鷹は爪を隠す、とはよくいったものです。

私のように世間に認められれば認められるほど、無名のきわだった才能にコンプレックスをいただくものです」

「そういうものですか。

先生にコンプレックスをいただく者はべらぼうに多いでしょうが」

「数や量ではなく、濃度とか密度の問題です。

だれが憎いって、だれよりも才能があつて、しかも偉人になりたがらない者ほど、憎いやつはいませんよ。

玄信、極齋、典禪の名前や評価があがればあがるほど、この三人は、闇のなかで嘲笑っている声を、声なき声を、否が応でもきかなければならないんですから」

「失礼ながらそれは、自意識過剰というものではありませんか」

この舟木の言葉に、荒野はかんがえこむ風だった。

それでも、そうではないと首をふった。

「話はおしまいです。

舟木君、そろそろつきますよ」

舟木が外に目をやると、海がひろがり、江ノ島が鮮明に見えた。

そとの世界は、荒野の暗く混濁した話とは対称的に、明るく透明だった。

ベンツが静かにとまり、荒野と舟木はおもむろに車からおりた。

荒野は、ちかくのレストランを指さし、舟木にそこでランチでもとりながら待っていてほしい旨を伝えた。

そしてかるく手をふると、自分はひとりで、江ノ島にむかつてあるきはじめた。

舟木は、最後の仕事をなすとげる気持で、荒野のちいさな後ろ姿が橋をわたり、すっかり見えなくなるまで見とどけた。

六日、午後二時。

麻暮正作と花井健太は、〈秘龍窟〉の奥深くすすんでいる。

洞窟はどんどん細くなり、洞窟口から押し寄せる海水はますます勢いを増す。

ふたりが乗った小舟が烈しく揺れる。

「麻暮さん、もうこれ以上は無理ですよ」

花井の叫び声が、冷たい闇のなかで木霊した。

「もう臆病風に吹かれたのかい、ケケケ」

嗤った麻暮は、山高帽のなかから懐中電灯を取りだして、先方を照らした。

「僕だって一応刑事ですよ。」

でもこれでは風邪をひいてしまいます」

ひどい逆流とふりかかる水しぶきに難渋しながらも、なんとか二十メートルはすすんできた。

だが、先はまだ長そうだった。

「ここで諦めたら一生の後悔になりそうだな」

麻暮は独り言をいった。

「でもこれ以上、航海はできません。」

櫂が壁につかえてしまう」

たしかに小舟はもう限界だった。

麻暮はステッキで水のふかさを測った。

「よし、ここからはあるいていこう」

「駄目ですよ、溺死しちゃいます」

花井はまた抗議の声をあげた。

けっして臆病風に吹かれたわけではなく、犬死にしたくなかったのだ。

それ以上に、山風刑事のことが気にかかっていた。

「君もカナヅチでしたか、それはけっこう、カナヅチなら溺れることもない、沈むだけだ。」

君はボクと約束したよね、君の命は保証しない」

響く声でいいながら、麻暮は小舟からおりた。

小男の麻暮でも大丈夫そうなのを確認してから、花井もゆっくりと小舟をおりた。

水はさほど冷たくはなかったが、つよい臭いが鼻をついた。

それは、汚れた海水や死んだ魚や腐った藻の臭いではなく、人間の死臭に似ていた。

ふたりがおりた小舟が、すすっと入口のほうへ流されていく。

花井があわてて追おうとすると、

「あきらめよう、どうせここには、小舟を繋ぎとめておくところがない」

「しかし、帰れなくなりますよ」

「ケケケ、君は、生きて帰るつもりだったのかい」

麻暮の嗤い声が洞窟内に不気味に響きわたり、花井のふかい溜息を消した。

麻暮は初めて潜入したとはおもえぬほど、ぐんぐんすすんでいったが、花井はどうしようもなく遅れた。

なんども躓きよろけて、壁に手をやったが、厚い蘚苔のために掴むところはなにもなかった。

「ひどい足場ですね、水の底は石ころだらけだ」

「石なんかじゃない、ケケケ、人間の髑髏だよ」

「げげげ」

足踏みをしながら花井は、麻暮に同行したことを半ば後悔していた。

(それにしても、この麻暮正作は、なんという人間なのだろう。

こんなタイプの人間は、刑事仲間にも、自分が手がけた犯罪者にも、ひとりもいなかった。)

花井は麻暮の黒い後ろ姿を見つめながら、

(山さんだったら、どうおもうだろうか、どうするだろうか)

とおもってみた。

それでもがんばって、さらに十メートルすすんだところで、麻暮がふりかえった。

「ここからはのぼりになる。

君のきれいな海水ともおさらばよ」

「それはたすかります」

とはいえ、洞窟は急激に狭くなり、完全に頭がつかえた。

麻暮と花井は、一本の懐中電灯をたよりに、腰をかがめて這いのぼっていった。

「この先には、いったいなにがあるのですか」

花井が麻暮の臀部にむかっていうと、

「闇よりも深い闇、死よりもおぞましい死」

と、麻暮はまるで鼻歌を歌うかんじで答えた。

六日、午後二時半。

荒野大三郎は、江ノ島の灯台を背に、切りたった断崖の頂上に立ち、海をながめている。

浪は荒く、船は見え、水平線には黒雲がわだかまっていた。

荒野はなんだか首をふったのち、二歩三歩さがって、古い松の大木の幹に触れた。

すると、荒野の目の前の岩が徐々にうごき、深い割れ目がのぞいた。

岩のうごきがとまると、荒野はその割れ目に両足をいれた。

みるみる荒野のからだは割れ目に沈み、岩はふたたびうごきだして元の位置にもどった。

ほぼ五分後、荒野は、無数の小部屋を左右にしたがえた廊下をあるいている。

各小部屋の錆び付いた鉄の扉は、鉄格子付きだったが、長い廊下には、緋色の絨毯がしきつめられていた。

しばらくゆっくりと歩いていた荒野は、ひとつの小部屋の前でつと足をとめた。

小部屋のなかから、小さからぬ話し声がきこえたからだ。

声の主は、川上宙衛門と養女の真希だった。

荒野は鉄格子の近くまでいったが、ふたりは気づかずに口論している。

「もういい、真希、おまえの言い分はわかった。

だがわしは善とか悪とかを云々しているのではない。

現実には善悪は存在しない、観念だ。

おまえは自殺を悪だといった。

だが自殺は悪ではないし、むろん善でもない、死が悪でも善でもないのと同様にだ。

わしはこうおもう、人間のなかにすでに死がある、人間は生まれたときから死につづけ

ている。

ゆっくり死ぬか、ゆくりなく死ぬか、ずるずると死につづけるか、潔く死ぬか、そのちがいでいい。

潔く死ぬことは、むろん美しく、ずるずると死につづけることは、とうぜん醜い。

たとえばその例がわしだ、わしは死に時を逸してしまった、哀れな老人だ、落ちこぼれの科学者だ。

ゆえにわしの役目は、ただひとつしか残されていない、それは、自殺志願者をこころおきなく、他人に迷惑をかけずに、ひっそりとおごそかに死なせてあげることだ。

それこそがわしの天命なのだ」

「詭弁ね、余計なお節介といってもいいわ。

あなたは荒野大三郎の操り人形よ。

さっき、荒野を神だといったわね、なら、あなたはキリストのつもりかしら。

わたしにいわせれば、ユダよ、世俗のユダ。

わたしも正直、自殺しようとおもったことが、なんどかあるわ。

最初は十七歳、養父のあなたにレイプされたから。

それから二十歳のときに、男に騙されたから。

そんなわたしを救ってくれたのは、神でも仏でもなかった、舟木英介さんの存在だった。

けれども昨年、わたしは結果的に、大切な舟木さんを裏切ってしまった。

わたしは松本大海に同情して、心中しようとしたわけではないわ。

大海の烈しい愛情と欲情に吸い寄せられ、舟木さんの存在を見失いそうになった、自分に失望したの。

でもわたしは、ようやく自分を取りもどした、自分のなかの舟木さんを取りもどしたのよ。

わたしはもう、自殺なんかしようとしておもわない、あなたに殺されたって、わたしは死ぬものですか。百回も生まれ変わって、わたしは愛をつらぬくつもりよ。

いままで自殺した、何百何千何万何億のひとつたちだって、きっとあの世で後悔しているにちがいないわ。

そう、たしかにわたしも死につづけている。

数十年後には、あなたみたいに老醜をさらすかもしれない。

けれども、人間は不滅だわ、生きるおもしろい、愛するおもしろいは、不滅なの。

人間は素敵、生きながら、生まれ変わることができるんですもの」

「それは、甘い理想論だ。

いいか真希、冷静によくかんがえてみろ。

自殺できるのは、人間だけだ、ということは、自殺こそ最も人間らしい行為といえる。

人生いろいろ人間それぞれ、自殺を実行することで、はじめて生のよろこびを味わう者だっているのだ。

安楽死が許されるとわかって、感謝の涙をながすひともいる。

もしこの世界で、自殺が許されないとしたなら、それこそ闇だ、ファシズムだ。

自分の生命にたいする責任は、自分で果たさねばならない、それが自由というものだ」

「そんなセリフで、いままでどれだけのひとを騙してきたのかしら。

わたしはもう騙されない、自殺は殺人よ、自分を殺すことですもの。

殺し合いは、弱肉強食の動物の特権かもしれないけれど、弱いひとこそちゃんと生きて

いけるのが、まともな人間の世の中ではないかしら。

もし人間の世の中に、価値というものがあるとしたなら、そのことだけかもしれない。

世界大戦でどうして人間は懲りなかったのかしら。

朝鮮でもベトナムでも、あいかわらず弱いひとたちを殺しつづけて。

それなのに、まだ平和な日本では、あえて【死んだる団】なんかをつくる。

平和がどうしていけないの」

「人間の感情は、単純なものではない。

おまえのいう愛には、背中合わせの憎しみがある。

わしはなんどもいったように、【死んだる団】を正義の集団だなどと、嘯いているわけではない。

殺したいほど憎いやつが、この世に存在していたなら、殺すべきなのだ。

人間はなにをしてもよい、が、責任はとらねばならない。

法的責任ではない、自分の命と相手の命を、ひきかえにするという形でとる責任だ」

「狂人だわ、単細胞の命しらず。

命を惜しむ人間が、命を惜しまない人間から、無闇に命を奪われていいわけがないわ。

あなたは卑劣よ、卑しい人間だわ。

もしかすると、人間ではないのかもしれないわね。

自殺志願者を吸い寄せて、屁理屈でそそのかし、殺人を強要する。

どうせ自殺するなら、悪党を殺してから自殺しなさい、とね。

それが世のため人のため、もしかすると、英雄として歴史に名を残すかもしれない、とね。

おそろべきやり口だわ。

荒野大三郎の目的はなんなの。

世の中を混乱と恐怖におとしいれ、あなたたち狂人の世界をつくることなのかしら」

「荒野大人の思想は崇高だ。

荒野大人の声は神の声だ、あるいは天地自然の声だ。

自殺するも、天地自然、暗殺するも、天地自然。

おまえは、朝山完吉先生の『暗殺論』を読んだことがあるか。

『暗殺論』にいわく、【暗殺は、天の声に導かれた者が、天の声に背いた者を抹殺することである。

手段を選ばず、問答無用。

暗殺がひどく暗い印象をあたえるのは、それが殺人だからでも、秘かに行使されるからでもない。

天の声は、暗黒の宇宙からひびいてくるからである】」

「『暗殺論』には、こうも書いてあるわ。

【哀しむべきかな人間、神は人間に多くをあたえすぎた。

最も多くあたえすぎたものは、殺人の知恵である。

最も少なくしかあたえなかったものは、人間はだれでもいつかは死ぬ運命にあるという自覚である。

この自覚から、情が芽生え、愛が生まれるというのに】」

このときようやく、荒野大三郎は、鉄の扉をゆっくりとひらいた。

川上宙衛門が直立不動の姿勢をとった。

宙衛門の様子に苦笑しつつ、荒野は真希を見て静かに口をひらく。
「真希さん、もうこれ以上、お父さんをいじめないでください。
ほんとうにすまないことをしました。
真希さんの自由を奪ったのは、大海の父親としての、私のわがままにすぎません。
真希さんは、お父さんよりも、この私に文句をいいたいのだろうし、議論もふっかけて
いのでしょうか。
けれども残念なことに、真希さんにも私にも時間がないのです。
舟木君が真希さんを待っているのですから。
秘密の出入り口はしていますね、そこからでて、江ノ島をかけおり、一目散に橋をは
しりぬけてください。
その先のレストランです、さあすぐにいきなさい。
いままでのことは忘れて、元気で幸せに暮らしなさい」
真希はひとことも発することなく、小部屋をとびだした。
荒野に呪いのことばを浴びせたい気持よりも、舟木に会いたい気持のほうが、百倍もつ
よかったのだ。

六日、午後三時半。

麻暮正作と花井健太は、まだ秘龍窟のなかにいる。
洞窟内はますます細く狭くなってきて、ふたりとも這いつくばってすすんでいた。
意味ありげな横穴がいくつかあったが、無視して本道をすすんだ。
「麻暮さん、お願いがあるんですが」
花井はたまりかねていった。
「お金ならないよん」
「いえ、僕の鼻先で、そうなんどもオナラをするのはやめてもらえませんか。
酸欠状態です」
「小舟を借りた食堂でね、御礼のつもりで、サザエの壺焼きを十個もたいらげたのよん、
ケケケ、オナラどころかウンコしたいくらい」
「なら、オナラはがまんしますが、腹がへって死にそうです。
なにか食べるものありませんか」
「刑事がなにを情ないこといつているのさ」
そう邪険にいいながらも、麻暮は帽子のなかから、なにかを取りだして花井に与えた。
「なんですか、この鼻くそみたいなものは」
「忍者の常備食、栄養満点だよん」
「ああ、聞いたことあります、いただきます。
なかなか珍味ですね」
花井は、麻暮の鼻くそを飲みこんで、満足げに腹をさすった。
「ほら、先のほうに光が見える、いよいよだよん」
麻暮は奥歯をかみしめてささやいた。
光がつよくなってきて、花井の酸欠もなおりそうだった。
「なんか入口らしきものが見えますね」

「奥はどうやら、巨大な建造物だ。

予想どおり【死んだる団】のアジトにまちがいないよ、ケケケ」

「苦労した甲斐がありましたね」

「いいかい、ボクは姿をくramsから、君は正々堂々とはいっていけ。

なにかあったら、ボクが助けるから心配いらない。

まちがっても、警察手帳なんか見せるんじゃないよん」

「了解しました」

「それともうひとつ。

不死身のボクに万一のことがあったら、君の見聞きした総てを、ライターの山内参三に伝えてくれないか」

「承知しました」

洞窟の行き止まりは巨大な空間で、その一角に〔お入り口〕と表示のついた、開閉式のガラス扉があった。

そこにはいった途端、麻暮はいったとお姿をくramし、花井は正面の〔お受け付け〕という看板の前までいった。

看板の下に、なんの変哲もない、簡素な木の机と二脚の椅子がある。

見回すと、だだっぴろい田舎の役所をおもわせる雰囲気だが、だれもない。

風はまったくないのに、暖房もしてあるはずなのに、妙にひんやりとしていた。

天井が高く、教会くらいはある。

奥がやけに深そうで、暗くて判然としないが、緋色の絨毯をしいた廊下が見える。

とりあえず花井が椅子に座って、

「ごめんください」

というと、三分ほどして、だれかが奥からでてきた。

黒い頭巾をかぶって、目と口しか見えないが、めっぼう体格のいい男だった。

おもわず花井が立ちあがって身構えると、黒頭巾はまあまあというふうに両手をさしだして、花井をふたたび椅子に座らせた。

黒頭巾もおもむろに椅子に座ると、勝手にしゃべりだす。

「やっぱりお客さんかあ。

裏からくる人ははじめてだから、気づかなかったよお。

あんまり暇だったもんで、マンガ読んでたんだなあ。

失礼しましたねえ、なにせ一週間にひとりかふたりかだもんよお、ひどく退屈で自殺したくなるくらいさあ」

黒頭巾の声は若く、二十歳そこそこだろうと、花井は読んだ。

「僕は花井健太といいます。

新宿でサラリーマンをしています」

花井の自己紹介を、黒頭巾は途中でさえぎって、

「そんなことは聞きたくないんだなあ。

それに泥だらけのスーツ着たサラリーマンなんて、見たことないよお。

まずはこの〈申込用紙〉に書きこんでもらってねえ。

実印とか自己証明とか、そんな面倒なものはいらないけどお、一九七〇円の実費はいただくことになっているう。

去年は一九六九円だったのお。

来年は一九七一円になるけど、物価が高くなるからねえ。
それと領収書は発行しないよお」
黒頭巾は花井に、一枚の用紙と一本の鉛筆をわたした。
「消しゴムはさあ、鼠に盗まれちゃったんだよお。
こんどとつつかまえて、天ぷらにして食ってやるう。
だからもしまちがえたら、鉛筆でぐちゃぐちゃやってくれればいいよお。
そうそう理由の欄とかはさあ書かなくてもいいからねえ、どうせだれでも嘘しか書かないんだからさあ」

黒頭巾の早口をききながら、花井は鉛筆を手にして〈申込用紙〉をのぞきこんだ。

〈申込用紙〉は、自殺の申込用紙だった。

「自殺理由」「形見受取人」「自殺方法」(十種類のメニュー)などの欄があり、【自殺請負所】所長・川上宙衛門宛に署名することになっている。

下欄に附記として、こうある。

【自殺する前に、どうしても殺したい人間のいる方は、お気軽に受付までそう申し出て下さい】

花井は武者震いを覚えた。

麻暮の言葉どおり、ついに【死んだる団】のアジトにたどりついたのだ。

しかもその仕組みの一端もわかった気がした。

どうしても自分では自殺できない自殺志願者を、この【自殺請負所】が請け負う。

そして、殺したいほど憎い人間がいる自殺志願者は、おそらく川上所長の説得の後、即刻【死んだる団】となって世間に放たれる。

「お客さん、そんなに震えたら記入できないよお。

殺されるわけじゃないんだから、自分で死ぬんだからなあ。

おれは【自殺請負所】の受付兼執行人だよお。

執行人というと死刑執行人みたいで厭だけどさあ、介添人とでもいったほうがいいかあ。

前は専門にいたんだあ、でもさ自殺しちまって、おれが兼任というわけさあ。

それでも給料二倍になったわけではないよお。

そらあ、自殺したい人間ばかり見てたんじゃ、自殺したくなる気持はわからないこともないけどお。

でもよ、かんがえかたひとつ、やりかたひとつで、愉しみが無いわけではないんだあ。

ききたいかい、ききたいだろお。

ここにくる三人にひとり、女さあ、そのうちの三人にひとり、やらせてくれるんだあ。

どうせ死ぬんだからいいじゃないのって、土下座してたのむんだあ。

ブスだろうとババアだろうと、わけへだてなくう。

だめだめ、きちんと真面目にたのまなくちゃあ。

ここではレイプなんか成立しないのよお、なぜってさ、あれは命が惜しい女だけに通用するんだからさあ。

おれはさあ、自殺するやつの心理がぜんぜんわからないのねえ。

きっとインポなんだなあ、女は不感症かあ、そうおもうことにしてるんだあ、面倒くさくなくていいもんなあ。

面倒なことかんがえたりするの、おれ苦手なんだあ、無教養だからあ。

お客さんもそうなんだろう」
「インポのほうですか、無教養のほうですか」
花井は、黒頭巾が饒舌なのをさいわい、時間稼ぎをすることにした。
「インポのほうにきまってるだろう」
「それは秘密です」
「そうだろうなあ、自殺するやつってさあ、変なプライドだけはあるんだよなあ。
どうせすぐにガイコツになっちゃうのにさあ」
「あの、ひとつききたいんですけど」
「質問は受け付けないことになってるんだあ。
おれは身の上相談のぶんまで給料もらってないからなあ。
ボランティアだなんておもっちゃいけないだろうねえ、おれは高給取りなんだよお。
先月はお客さん多かったんで、ボーナスまででたんだよお。
七歳の男の子までいたんだぜえ。
今月はまだ十人目のお客さんだよお。
このあいだ、川上所長に文句いったんだあ、ロコミだけでなくてさあ、もっと宣伝しな
きゃ駄目だってさあ。
まあいいかあ、質問受け付けるかあ、ヒマだもんなあ。
お客さんにおけつ貸してもらおうほど、欲求不満でもないしなあ」
「ここに、ええと、【自殺請負所】に」
「通称【D】っていうんだあ、【D】でいいよお」
「この【D】に、高杉京平、藤上吾郎、辻中亀夫はきましたか」
「個人情報秘密なんだよお。
お客さんのことも内緒にしといてあげるからねえ」
「僕のことは内緒でなくていいですから、教えてくださいよ」
「毎年五千人やってくるからなあ。
来年からは一万人にしたいんだがなあ。
名前なんかおぼえられないよお」
「この〈申込書〉が残っているでしょう」
「なんか刑事に訊問されてるみたいで厭だなあ。
じゃあ教えるけど内緒だよお。
秘密は墓場までもって行ってねえ」
「もっていくよもっていくよ」
「高杉、藤上、辻中、清水、松本、朝山。
やつらは、〈申込書〉の附記を読んでさあ。
あとは川上所長の担当だから、おれはしらないよお。
立花という女もそうだったなあ、めっぼういい女だから、土下座したんだけどさあ、あ
れは不感症だなあ。
おれが覚えているのはこの七人だけさあ。
この七人は【D】で自殺はしてないから、おれの役割分担じゃないのさあ。
あとさ、お客さん、しってるかなあ、見延山の変な事件、あの三角関係の三人のうちの、
だれかがそうだってさあ、おれはくわしくしらないんだけどお」
「ほかの人は、みんな【D】で」

「あたりまえよお、そのためにわざわざやってきてるんだからさあ」
「たとえばですが、【D】にわざわざやってきて、心変わりする人はいないんですか」
「えええ、お客さんもその口なお」
黒頭巾は、大袈裟な嘆きの声をあげた。
「ですから、たとえばの話で」
「よかったあ、また面倒なことになるんじゃないかとおもったら、心臓が縮みあがってさあ」
「やはり、いるんですね、心変わりが」
「まあなあ、いろんなパターンがあるんだけど、〈自殺方法〉のメニューを、気に入らないお客さんが大半でさあ。

- 1 縊レテ
- 2 入水シテ
- 3 刃物ニテ
- 4 飛道具ニテ
- 5 毒物ニテ
- 6 高所ヨリ投ジテ
- 7 火焰ニテ焼身
- 8 電気ニテ
- 9 瓦斯ニテ
- 10 注射ニテ

どれもポピュラーでいいとおもうんだけどねえ。
お客さんはどれを選ぶのかなあ」
「もうすこしかんがえさせてください」
「かんがえてくれるのは助かるなあ、駄々をこねるお客さんがけっこういるんだなあ。
そういうお客さんには、しかたないから特別メニューを紹介するんだあ。
これも十種類あるのさあ。

- 1 猛獣ニ食サセテ
- 2 大型万力ニ潰サレテ
- 3 辜丸殴打ニテ (タダシ男性ニカギル)
- 4 腹上死ニテ (コレハ女性モ可)
- 5 致死率百パーセントの病原菌ニヨリテ
- 6 放射性物質ニテ
- 7 麻薬ニテ
- 8 特種騒音ニテ
- 9 新開発珍器具ニテ
- 10 拷問器具ニテ

なかなかイカス、傑作メニューだよなあ」
「いやはや辛そうなメニューですね。

余計に厭がるのではないですか」

「ところがどっこいさあ、おれには理解できないんだけどお、やつらってさあ、せっかく死ぬんだから、あっさりなんて厭だ、痛くて苦しくて悶え死にたいっていう、変態意識がめばえるんだなあ」

「まさか、僕はそんなことないですよ」

「それはよかったあ、ここはよお、できるだけ楽に死ぬるよう最新の設備がほどこしてあるんだあ。

安い早い苦しくないの三拍子そろってるう、とんとん拍子がうちのモットーなのさあ。

即死を望む精神病患者とか、安楽死を望む末期ガンのお客さんには最高さあ」

「心変わりの理由が、〈自殺方法〉の問題ではなく、ようするに目が醒めたということだったら、どうするのですか」

「目が醒めたというのなら、再度眠ってもらうしかないだろうよお」

「それってどういう意味ですか」

「鈍いお客さんだなあ。

なんじゃれかんじゃれ、まあひとことというよお、死んでももらうしかないのさあ」

「殺してしまうんですか」

「人聞きのわるいこといわないでよお、ちゃんと川上所長に説得してもらうのさあ、心変わり単なる気の迷いにすぎないってねえ。

まともで完璧な自殺志願者になってもらってから死んでもらうのよお。

うちはれっきとした【D】であって、屠殺場じゃないんだからさあ。

まあ気にすんなってえ、怒ってるわけじゃなくてさあ、こういうところはどこでもそうじゃんかあ、秘密主義っていうのかなあ、わかるだろお」

「秘密主義にしてはよく喋ってますね」

「お客さんはぐだぐだいわないで死んでくれるひとだと、信じてるっていうのかあ、おれは見る目があるんでさあ」

黒頭巾は花井に鼻面をつき寄せてきた。

キスでもされるのかとのけぞったが、黒頭巾は〈申込書〉をのぞきこんだだけだった。

「なんだあ、まだ書いていないのお。

性別と年齢と体重だけは正確に書いてよお。

量のかげんがあるんでさあ」

「量とか、かげんとか、どういう意味でしょう」

「薬とか瓦斯とかあれこれ、致死量というものが大事なんだよお。

経費節減で川上所長もうるさいさあ。

それなのに」

「それなのに、かげんしだいで失敗もあるということですか」

「とくにさあ、女のお客さんは、年齢とか体重をごまかすからねえ。

ええと、去年は何回失敗したっけかあ、失敗するとよお、お客さんも苦しいだろお。

それですっかり懲りて、もう死ぬのやあめたなんてえ。

悲惨な結果になるのはあ、おれだって好きってわけでもないんだあ」

「結果、どうするんですか」

「どうもこうもねえよお。

暴れ回るお客さん、逃げだそうとするお客さん、警察に訴えると騒ぐお客さん、おれを

殺そうとするお客さん。

どいつもこいつも力づくで押しえつけてよお、こんどは致死量の二倍でいくんだあ。

経費節減っていうのはよお、金かかることなんだよってさあ、川上所長にはいつもいつてるんだけどさあ」

「そうなるよ、自殺ではなく、殺人ですよ。」

そんなケースはいままで何件あったのでしょうか」

「お客さんたらあ、刑事じゃあるまいしい。」

そんな質問はいいかげんにしてもらいたいもんだあ」

そういう黒頭巾の目つきを見て、

(ヤバイ)

と花井は直感した。

(かんづかれています)

このとき、高い天井から嗤い声が出た。

「ケケケ」

二度三度と嗤った。

花井にはありがたいほどの嗤い声だった。

花井と黒頭巾が同時に見あげた。

天井に黒いかたまりがへばりついている。

(麻暮さんはまるで忍者だ)

と花井がおもい、

「でっかいコウモリだあ」

と黒頭巾がつぶやいたときには、麻暮はすでに黒頭巾の肩に舞いおりていた。

黒頭巾はしばし麻暮を肩車していたが、麻暮にクロロホルムをかがされたのちに、両足で首を締めつけられ、なんの抵抗もできずに烈しく床に倒れた。

それより早く、麻暮は黒頭巾の肩から飛びおり、歌舞伎のミエでもきるふうに、ステッキでトトンと床をたたくと、

「花びらが落ちるか心配したよん」

といいながら、胸の寒椿を大事そうに見た。

六日、午後四時半。

荒野大三郎と川上宙衛門は、【D】の奥の間にいる。

荒野は肘掛け椅子に座り、川上は直立不動の姿勢で、その前に立っている。

「どうやら鼠が潜入しているようですね」

荒野は、なにほどのこともない口ぶりでいった。

「鼠は猫が退治してくれるでしょう。」

それよりも、さきほどの荒野大人のひとことが気になります」

川上は遠慮がちの口ぶりでいった。

「なにかいいましたか」

「念力が消えつつあると」

「そうですか。」

なんとなくいってしまったのですね」
「朝山先生の死がショックだったのでしょうか」
「そうかもしれません。
それと木下弁太郎君にきいたのですが、息子の大海が【死んだる団】だということ」
川上の顔色が変わり、しどろもどろの声で、
「そそそ、それはわしもしりませんでした。
わわわ、わしは荒野大人の息子さんに会ったこともないし、みんな〈申込書〉に、ぎぎぎ、偽名をつかうものですから」
「もういいです、すんだことですから」
「朝山先生は、【死んだる団】に殺られたとききましたが」
「私も【死んだる団】に殺されそうになりました。
飼い犬に手をかまれるレベルではありませんね」
「わしの失態です、わしが【死んだる団】のメンバーから、殺したい相手を正確にききださなかったのがいけないのです。
申しわけありません、死んでお詫びいたします」
腰がくだけた川上は、土下座をした。
「そんな必要はありませんよ。
所長も遠からず消えることになるでしょうから」
「わしがだれかに殺されるということですか。
荒野大人以外にわしを殺せるひとはおりません」
「そうですかね。
私の予感、一度もはずれたことがないんですが」
「はい」
「だが、私の同胞の死は、私にとって哀しみであるとともに、悦びでもある」
「それは、わかっておるつもりです」
「私を、いや松本玄信を殺そうとしたのは、【死んだる団】の辻中亀夫でした。
これも私には予感がありました。
辻中は〈愛信会〉の信者でもありました。
そのためか、辻中の死は、私にとって悦びではありませんでした。
松本玄信は、死ぬには最高の時を逸しました」
「荒野大人は、この世界でいちばん孤独な方ですね」
荒野にきこえないいどの声で、川上は呟いた。
部屋には、バッハの『パッション』が微かに流れていた。
「さて、わしはなにをいたしましょうか。
自刃でしょうか、鼠退治でしょうか、【D】の強化でしょうか。
荒野大人、ご命令を」
上目づかいで荒野の眼を見ながら、川上は厳粛な声できいた。
「なにをしてもいいのですよ。
ただ、私の願いがあったら、全世界の同胞に、私の思想を伝えてほしいのです。
鼠が、もし、やつだとしたら、麻暮正作だとしたら、私は私の最後の声を発することなく、消えてゆくでしょうから」
そう告げる荒野の眼を、川上は戦慄しつつ見つめた。

川上が見る、初めての、荒野の怯える眼だったのだ。

六日、午後四時四十五分。

麻暮正作と花井健太は、【D】の奥へ奥へとすすんでいる。
左右の小部屋を無視し、緋色の絨毯をあるきながら、麻暮はステッキで床を烈しくたたいた。

その音に花井は後ずさりし、かわりに奥から白衣白髪の老人があるいてきた。

「なにものだ、わしは所長の川上宙衛門だ」

その威嚇する声に、麻暮はまったく動ずることなく、

「自分から名のるとは、潔い悪党だな、ケケケ」

「悪党はきさまたちだ。」

「ここは聖なる場所だぞ」

川上はふたたび怒鳴った。

「ケケケ、その聖なる場所の謎は、賢い受付さんのおかげで総てとけたがね」

麻暮は冷ややかにいうと、ステッキの先端を川上にむけた。

「なるほど、きさまたちは警察の者か。」

それにしてもよくここがわかったものだな」

「所長に用はない、荒野大三郎はどこだ。」

荒野に伝えるがいい、ボクが、麻暮正作がやってきたとね」

「マグレ」

「おや、ボクの名をごぞんじとみえる」

「荒野大人は神だ。」

神は、きさまみたいな俗人とはけっしてお会いにならない」

「その神の、化けの皮をはがしにやってきたのよ、ケケケ。」

探偵として、三十年前の親友として、十年前の義兄として、そしていま復讐の鬼として」

麻暮はにじり寄り、川上の体のあちこちをステッキの先でこづいた。

川上はだんだん蒼ざめてきて、皺だらけの顔の三分の一を占める紫色の唇を震わせた。

「乱暴はよせ、話せばわかる」

「ケケケ、話してわかる人間に、ボクはお目にかかったことがないよん。」

荒野大三郎をださないと、聖なる場所を爆破するしかないな。

手下の金助が、すでに仕掛けを済ませている。

あんたが開発した超弩級の【D爆弾】さ」

川上は五体を烈しく震わせ、

「莫迦をいわんでくれ。」

この聖なる場所ほど美しく重要なところが、他にどこにあるというんだ」

「ケケケ、話にならないね。」

そういう場所ほど爆発させると美しいんだよ。

神の化けの皮をはがすことほど、重要なことが他にあるというのかね」

川上は五体を震わせたまま、弁解ぎみに麻暮の説得にかかった。

「なあ、きいてくれ。」

自殺の悲劇ってやつは、それが暗いころのなかで決定されるまでの過程にあるんだ。
もはや決定してしまえば、なんとも明るいものだ、自然なものだ。

自然の人間がここにきて、自然に死ぬ。

自殺の〈自〉は自然の〈自〉でもある。

だれの迷惑にもならない、だれかに罪をおしついたりもしない。

人間がこの世にいるかぎり、自殺の種は残る。

その種が新しい芽をだす前に刈りとる。

【自殺請負所】通称【D】のこれがモットーだ。

われわれは美を守っていく、美の使徒であって、われわれは世俗でいう、なんの悪も実行してはいない」

「【死んだる団】も悪ではないというんですか」

花井がたまらずに、烈しく口をはさんだ。

「人間の怒り、それが正義から発しているならば、その意志を完遂することこそ、人間愛だ。

【死んだる団】は正義の軍団、自らの死を恐れぬ勇気ある志士たちだ。

このふやけた時代のなかにあって、志士たちだけが本物の人間だ」

「みんな自分が正義だとおもいこんでいるから、困るんですよ」

花井がこんどは溜息まじりにいった。

「人間の生命にたいする尊厳。

その思想がすべての誤りなのだ。

生きながら死んでいる人間の、なんとおおいことか」

川上の弁舌を、麻暮のステッキがとめた。

「ごたくはやめろ、ボクにとって、あんたはただのカスだよ。

あんたの大袈裟な言葉もカス、荒野大三郎の思想のカス、といったほうがいいかな。

カスを信じるのは、残念ながら頭でっかちのボウヤだけでね。

ボクは理屈に頭で応えない主義さ。

はやく荒野のところへ連れてゆけ」

「いやはや、なんともはや」

川上はうつむきながら首をふった。

白髪が乱れて額にかかった。

「そうか、あんたも死を恐れぬ勇気ある志士というわけかん。

それならこの花を捧げよう。

この花は、あんたの死にお似合いだよ、ケケケ」

いいながら、麻暮は胸の寒椿の小枝を抜きとると、その鋭利な先を、おもむろに川上の首筋にもっていった。

「麻暮さん、やめてください」

花井が叫ぶのと、麻暮の手が動くのが同時だった。

川上は首に寒椿の花を咲かせて、膝からくずれおちた。

五体が烈しくふるえ、小便が漏れた。

それでも川上は首をふりつづけ、涙をためた目で麻暮をうらめしそうに見た。

そして白衣のポケットから携帯マイクを取りだすと、搾りだす声で語りはじめるのだ。

「【D】の同胞よ、所長の川上宙衛門だ。

諸君、お別れだ、これが諸君に語りかける、わしの最後の言葉となろう。
むろん、わしの言葉は荒野大人の言葉に等しい、慎んで耳を傾けよ。
何者かが不気味な足音をたててやってきたのだ。
諸君、これは勝利でも敗北でもない、善でも悪でもない、天命なのだ。
諸君、わしのところは冷たい、そして熱い。
わしの死はすぐそこに迫っている。
嘆いてはならぬ、だれもとめられないのだ。
諸君、いまさらいうに及ばぬが、自殺は美しい。
諸君は美の創造者だ、陶酔の芸術家だ。
常に毅然とせよ、善悪の彼岸を超えて屹立せよ。
いずれ歴史が証明する。
来る二〇二〇年には、我々は数万倍のパワーとなって立ちあがるのだ。
わしの骨をひろってくれるのは、家族でも坊主でもない、暗黒の宇宙の海底だ。
いまわしの目前には、暗い原野がひろがっている、草も木も土もない、無人の荒野だ。
諸君、わしを信じよ、荒野大人を信じよ。
諸君、苦悩は美しく、潔さは美しい人間だけのものだ。
諸君、こころのなかに死を見つめよ、人間の最も崇高なるものは、絶望の認識だ。
わしの肉体は滅んでも、荒野大人の思想は永遠だ、自殺の精神は不滅だ。

【D】こそ永遠。

半世紀後にわしは、荒野大人の精神とともに復活する。

【死んだる団】万歳」

ここで川上は息絶えた。

「ケケケ、これで荒野は手足をもがれたも同然」

麻暮は川上の遺体を蹴飛ばし、その手から携帯マイクをもぎとった。

「諸君、この巨大な施設の隅々にわだかまっている諸君よ、麻暮正作だ。

川上所長はボクがしまつした、ケケケ。

すぐに荒野大三郎も片づける。

だがボクは、自殺なんかしないし、決して諸君に殺されたりもしない。

ボクを恐れる者はとっとと逃げだすがいい。

ボクに殺されるよりは賢明な選択だ。

【D】も【D爆弾】によって、あと三十分足らずで爆発する」

麻暮の両眼が赤々と異様に輝き、一目見た花井の背筋に冷気がはしった。

そのとき廊下の突き当たりの奥に、ちいさな黒い影がはしった。

麻暮も花井も見逃さなかった。

「あの影は、いったい」

花井が麻暮にきくと、

「荒野大三郎の影だ」

と麻暮は断定し、いうよりはやく俊敏に影を追った。

とうぜん花井も続いた。

六日、午後五時。

舟木英介はレストランをでて橋まで歩き、吹き始めたばかりの寒風のなかを立ちつづけている。

あの江ノ島に消えていった荒野大三郎のちいさなうしろ姿を想いだしながら、なぜか舟木は、善悪を度外視して、あの男こそ男のなかの男だとおもわれた。

いまでは舟木は、もうすぐ川上真希に会えることを素直に信じていた。

そしてこんどの一連の事件で、自分が危険な目に遭いながらも、なんとか生き抜いてきたことに、心底から湧きあがってくる幸福感をかんじていた。

(真希がやってきたら酷い意地悪をしてやろう)

と舟木は決めていた。

それくらいの権利も義務もあるとおもっていた。

(真希と目が合った瞬間、「バイタ」と叫んで平手打ちをくわせてやろう。

そして逃げてやろう。

真希は追ってくるだろうか。

追ってこなければ、それまでのことだ)

黒い雲がでてきた。

雲は強風に追いたてられることなく、江ノ島の上空にわだかまりはじめていた。

落ちる夕陽はまだ残っていたが、島の灯台に灯がともった。

小づくりな島が、巨大な黒い恐竜の背に見えた。

その黒い背から、ひとりの女がすべりおちてきた。

赤いスカートが風に舞っている。

まちがいなく、真希だった。

舟木は言葉をのみこんだ。

真希はいっさんに走り寄ってくる。

舟木を見る真希の両眼から、大粒の涙がとめどなくこぼれおちた。

舟木は精一杯の笑顔をつくり、おおきく両手をひろげた。

真希はその腕のなかへ、身投げした。

舟木は真希をつよく受けとめた。

(翌日、舟木英介と川上真希は、入籍することになる。

舟木はボディガードはむろん私立探偵も辞めて、山内参三の推薦で大手出版社発行の週刊誌の副編集長に就任し、十年後にはその出版社の副社長になっている)

六日、午後五時十五分。

麻暮正作と荒野大三郎は、江ノ島の灯台を背にした断崖のうえで、すでに烈しい死闘をくりひろげている。

花井健太は、麻暮との約束を守り、いっさい手をださずに見まもっている。

麻暮も荒野も、花井刑事が一度も見たことのない、不思議な術を駆使して闘っていた。

麻暮はまさに忍者であり、軽業師でも手品師でもあった。

麻暮のステッキは、刀になったり槍になったり銃になったりした。

麻暮の山高帽は、兜になったり楯になったりした。

麻暮は、ステッキを支えに、おおきく空中を飛翔し、宙返りし、岩だらけの足場は麻暮にとって、恰好の戦場とおもわれた。

いっぽう荒野の術は、柔道でも合気道でも空手でもなかった。

中国のカンフーというものかもしれない、と花井はおもったが判然とはしなかった。

荒野の拳は、岩よりも硬く、荒野の手刀は、日本刀よりも斬れそうだった。

荒野の強烈な足蹴りをまともに受けた麻暮は、十メートルも飛んで、大岩に顔面を打ちつけた。

その音は、蹴られた腹部の、内臓のどこかが破裂したかんじの音とともに、花井には鼓膜を破られた気がした。

だが荒野も同時に、右肩を撃ちぬかれ、左足を切り落とされていた。

のこった左手と右足にも、深い傷があった。

あふれでる鮮血が、最後の夕陽をあびて、黄金色に輝いていた。

顔面をつぶした麻暮は赤鬼の形相で、出血多量の荒野は凄惨な姿態だった。

陽が水平線に没しかけ、黒雲が天空を占領しつつあった。

花井は息をつめ、殺気をみなぎらせて睨み合うふたりも、無言だった。

荒い息づかいは、強風に吹き消された。

ふたりが声を発したのは、一度きりだった。

それも、お互いの名を叫びあった、それだけだった。

(おそらくふたりは、十年前に言葉による闘いをやり尽くしていたのだろう)

と花井にはおもわれた。

(麻暮正作と荒野大三郎、風体の似た、正体不明の、殺意まみれの、この兩人こそ、まさしく【死んだる団】の精鋭と呼んでもいいほどだ)

と花井にはおもわれた。

陽が水平線に没する速度と、ふたりが接近する速度がいっしょだった。

ふたりはどちらからともなく、お互い手の届くところまでつめ寄ると、やはりどちらからともなく、組みあった。

麻暮のステッキが荒野の胸を刺し貫いていたが、烈しく抱擁している様に、花井には見えた。

そしてどちらから仕掛けたのか、ふたりは横に、水平線のほうに飛んだ。

忽然と、ふたりは消えた。

おもわず声をあげ、すかさず花井はかけ寄った。

腰をかがめ、断崖からはるか下方を見おろすと、薄闇のなかで水飛沫があがった。

それが波にうち消されると、海面の中心が暖色に染まった。

いっしゅん花井はそれを、

(寒椿の花だ)

とおもった。

硬直した花井は、寒椿が闇にのみこまれるまで、呆然と見おろしつづけた。

だが、麻暮も荒野も、海面に浮かんではこなかった。

